

中国貴州省黔東南苗族・侗族自治州の工芸産業の変化

—農家工芸を中心として—

坪郷英彦

1. はじめに

2019年9月14日から18日にかけて、貴州省黔東南苗族・侗族自治州を対象とした工芸調査を実施したのでその概要を報告する。

筆者はこの地域に数度、住居調査を主目的に調査を行ってきたが、その都度、大きな変化を感じてきた。特に主調査地である、雷山県西江村は集落全体が観光村となり、瞬く間に、村に至る道路が整備され、村の中にはホテルが林立し、やがて2008年入村料を取るようになった。こうした大きな変化を前にし、2006年に行った同じ地域の工芸を対象にその後の変化を確認する調査計画を立てた。今回調査ができたのは、雷山県羊排村櫛制作、雷山県長豊村陶器制作、従江県高増村藍染めと天秤棒制作、従江県芭沙村観光、溶江県巨洞村藍染め制作の5カ所である。調査日程を表1に示す。前回と同じ場所での調査ができたのは従江県高増村、芭沙村、溶江県巨洞村の3カ所である。雷山県羊排村と長豊村はそれぞれ州級非物質文化遺産として登録されていることを調査時に知った。前回の状況と大きく異なるのは、観光化が進み、特に雷山県西江観光村は地域経済に大きな変化をもたらしていること及び国レベルで非物質文化遺産の制度が作られ、これに準じて州級非物質文化遺産が整備され、その中で多くの民俗技術が取り上げられていることである。非物質文化遺産は無形文化遺産とも呼ばれる。その状況を概観しながら、調査地の工芸と住民の意識とその変化を報告し、最後に農家副業として自然利用工芸の重要性、特徴的な美について私見を述べる。

山口大学は貴州大学と2006年研究協定を結び、同年総合的な調査を実施し、2010年にその成果を出版した(注1)。その中で、筆者は「苗族・侗族自治州少数民族の文化資源とその動態的保存の提案」を執筆、当時の対象地区の工芸事情と地元住民の工芸品に対する誇りを明らかにした。その後2008年のオリンピック開催をきっかけとして観光化が進み社会環境、工芸の様相が変化した。

表1 黔東南苗族・侗族自治州工芸調査日程

2019年9月14日	雷山県羊排村の櫛制作	
	雷山県長豊村の焼き物産地	雷山県泊
2019年9月15日	従江県高増村機織り・天秤棒制作	従江県泊
2019年9月16日	従江県芭沙村観光村	
	溶江県巨洞村藍染め	貴陽市泊

2. 調査の概要

(1) 雷山県羊排村

楊光学氏は1947年10月22日生まれで、櫛の制作技術に対して州級非物質文化遺産の資格を持つ。木目の細かい現地名水絲木(和名未調査)という木を加工し、櫛の制作を行う。苗族のサブグループ毎に櫛の形が違い、それぞれを作り分ける(写真1)。

櫛作りには水絲木という木を使う。1年中取ってもよいが、冬採るのが一番良い。1日で50kgとり、

採りに行く際は3日掛けて150kg採取する。昔は自由にどこの木を切っても良かったが1980年以降は国が森林を管理するようになって自由に採れなくなった。櫛は12月から2月に一番売れる。暑いときは使いたくないので売れない。

櫛の生地は山梔子（くちなし）で染める。山梔子の実をつぶして、布で濾過して澄んだ液を取り出し、水で薄めて生地に塗布する。8月から9月は染料として使うくちなしの実を採る時期である。2日かけて1kgの実をとる。郎徳村が採取先である。

苗族の櫛作りは農業との兼業である。家では豚を飼い、製粉機を置いて、米やトウモロコシ飼料の製粉を行っている。また、楊光学氏は村の要職を長年勤めている。櫛は苗族女性の髪飾りには欠かせないもので、その形は苗族のサブグループを示す意味がある。櫛制作はこの地域にとっては重要な産業であり、その第一人者として州級非物質文化传承人に登録された。

楊光学氏は小椅子制作（凳子deng）も行う（写真2）。作られたものは全高580mm、幅335mm、奥行420mmの大きさである。中国各地で木又は竹を材料として同形のものが作られているが、ここでは床几として使うように小型に作られている（注2）。親族や近隣の人が集まることがよくあるようで、小椅子や背もたれのない床几がたくさん広間の隅に積み重ねられている室内の情景をよく見かけた。

家の神を祀っている。家の神 [nia ma] の祀り方は次の通りである。家の一室の一つの壁を祭壇に宛て、上段と下段の2段に分け杯を二つずつ置く。上の段は子どもの守り神で、アヒルと魚を食べるときはここにもお供えする。下の段は老人（先祖）を祀る神。草を織ったマットは新嘗祭（砵新節）の印で、祖先に知らせるためのものである。

（2）、雷山県丹河鎮長豊村

雷山土陶器制作技法として州級非物質文化遺産として項目登録され、代表传承人として羅光選が登録されている。登り窯が6つあり、一つの窯に6軒と一緒に製品を入れて焼き、これを6つの窯で順番に繰り返していく。若い人で24、5歳、もっと若い人は出稼ぎに行き帰ってこないという。以前は2つの村で陶芸をやっていた合わせて110軒くらいあったが、今は一つの村、長豊村だけで、20戸未満である。現在鉄筋コンクリート造5、6階建ての中層住宅が建設ラッシュである。親と兄弟家族と一緒に住む中層の集合住宅である（写真3）。ローンを組んで建てており、その返済が心配だとの声が聞かれた。

釉薬は粃殻と石灰と泥の水を混ぜて作る。

長豊村の焼き物作りはこの地域の酸湯という鍋料理に欠かせないスープを作るための壺を制作しており、この土地にはなくてはならない産地である（写真4）。その壺は口の周りにリブがついた形で、中に野菜を入れ、リブに水を入れて蓋をすることにより、中の野菜を密閉することが出来る。また、発酵して壺の中からあふれた液がリブに溜まる。この地域の苗族の暮らしに根ざした製品である。

調査時作成した羅兄弟の工房スケッチを示す（図1）。15m×9m程の簡素な平屋建ての小屋で、屋根はトタン葺きである。ロクロは粘土製で、棒を凹みに差し込んで回転を与える方式で、弾み車の役割ももたせた大きなものである。予備のロクロがロクロ場うしろに置かれている。

（3）、従江県高増村

機織り及び天秤棒調査を行った。雷山県から従江県まで3時間、午後1時に高増村へ到着する。まず、かつて行われた高品質の手織布の調査を始めた（写真5）。前回尋ねた呉奶K氏を訪問したが不在のため、村の老人呉甫A（55歳）に2011年3月に撮影した、織物の整経作業を共同でしていた人たちの写真を見せながら、名前と関係を聞いた（写真6・7）。呉奶K氏の親族のつながりと近所の友人によって機織り仲間が構成されていることがわかった。以前訪れ、呉奶K夫妻と話をした時には、

近くに同じ織りのものを量産する織物工場が作られるので、そこに働きに出るようと、織機を壊して燃やした、との話を聞いたが、再度村の人に尋ねると、その工場は遠いところに出来ており、この村から働きに行っている人はいないとのことであった。工場が出来ると1日100元のアルバイト代が入るが、手織りだと1日5尺しかできない。機械織りの布は100円でいっぱい買える。手織りは手がかかるということで止めたという述懐を聞いたが、アルバイトによる、1日100元の収入は得ていない。

村の人に天秤棒（ベンタン）作りの人を紹介してもらい、制作者呉B氏を尋ねる。親戚や友達に作ってあげるもので、使う天秤棒の長さは身長にあわせて近い長さのものを選ぶ(写真8)。1.8mの長さで100元、1.6mの長さで45～50元もらう。材料は青岡木（柄材ブナ）で、近くの山に採りに行く。

水汲み用の天秤棒は特別の作り方で、先端の模様は刀を意味している。刀の形にしたのは安全、安心のための意味を込めてである。娘が嫁に行くとき水汲み用の天秤棒が財産の一つとして持参される。呉B氏の息子の結婚式行事である花嫁の輿入れの時、一番初めに水汲み天秤棒でものを運び、次からは一般の天秤棒でものを運んだ。また、呉B氏は嫁をもらった際、嫁いできた後、嫁のために天秤棒を作って与えた。呉B氏から作る際の、木取り、寸法取りを聞くことができた。その概略を図に示す(図2)。美しい形であるが、その制作方法は高さ60mm、幅50mm程、1800又は1600mmの長さの角材に高さ方向に20mmの中心線を引く。両端は二つの形のどちらかを選び、荷物紐をかける溝は12mmの幅で切り込む、後の寸法は前例を測りながら作る。中央部分は中心線の位置まで削り、そこから30～40mmの厚さ、幅50mmの高さに削る。そこから両端までは緩やかな曲線で削ってゆく。外丸、内丸の鉋を使って削っていく。あわせて、2011年に調査した水汲み用天秤棒と大型の天秤棒の実測図(図3)を示す(注3)。

鼓楼横の土蔵の中には村の守護神（Ganmosa）が祀られている。

高増寨は700戸あるが、2009年の火災で300戸焼けた。（別の人の話では焼失戸数40戸。）そのため住宅を建て直し、返済ローンの支払いでみんな困っている。古老に聞いた年中行事は次の通りである。

旧暦7月14日新しい米を食べる祭り（dakopei）の時、牛を殺して供える。

旧暦8月15日中秋節 牛を殺す。

新年1月1日 豚を殺す。

旧暦5月5日 端午。

旧暦6月6日洗牛 羊を殺す。

高増の織物は再興されてはいなかった。織物工場も高増からは遠く、時間をかけ手織りするより、決まった時間働いて、賃金をもらう方がよいということで、織機を壊したのだが、工場勤めは誰もやっていないようだ。どうして、織機を壊すような象徴的なことをして、手織りを止めさせたのかは未確認である。布を藍染めし、砧叩きをして製品にする仕事は現在も小規模に見られた。以前聞いた話では、手織りしても、高く売れないということで、その価値が広く認められていなかったようである。

調査した天秤棒は従江県の侗族だけが使用する形だという。中心の町である従江鎮で聞いた話では、日曜日毎に従江鎮で市が立ち、その時に小黄村の人が来て、天秤棒を売っているという。小黄村は高増村からさらに30分車で走った距離にある侗族の村で、小黄大歌が世界遺産に登録されている。

（4）従江県芭沙村

現地に宿泊し午前中インタビューを実施する。85歳の老人の話では自然寨5つから構成されているという。結婚はこの5つの寨間で相手を見つける。芭沙の呼び名は侗族の人が石寨（ビャーサー）と読んだことからこの名で呼ばれるようになったという。自分たちは芭沙苗寨全寨と呼んでいる。1940年頃に寨が火災に見舞われた。代表的な料理は豚肉の餅米包みである。

芭沙は西江と同じように観光集落化が進み、いくつかの宿ができていた。寨の人たちは農業と上手く兼ね合いを持たせながら、1日数時間のパレードに出るなどの観光アルバイトや、ホテルや土産物の経営を行っており、前回訪問したよりも人々の明るさを感じた（写真9）。

（5）、洛江県巨洞村

2005年9月に最初に訪問して、以後は対岸の道路から眺め、写真をとるだけであったが、今回は渡ることができた（写真10）。現在は常駐の渡船はなくなり、岸近くにいる巨洞村の人に声をかけて、船を出してもらった。土地の人によると渡船は現在営業しておらず、適宜船を呼んで乗せてもらう方式で料金は1人1元である。

2005年8月か9月に夜2時から火災が発生し、村の中寨から下寨まで燃えた。上寨は火災から免れた。上寨の外れ、約50m程のところにある穀物倉も延焼を免れた（写真11）。これ以後、半分以上の家族が川の対岸に住むようになった。前回住まい調査を行った、石S氏一家も対岸に移った。被災者への政府からの支援は瓦だけ支給があったという。新しい家を建てるにはローンを組む必要があり、その返済のために若者は出稼ぎに出るようになった。2016年政府機関の北京発展与改革委員会によって歩行橋が架けられることになったが、工事が中断している。歩道幅1mの人だけ渡れる橋である。火災後鼓楼とそのそばに劇場が作られた。劇場では旧の新年に歌ったり、踊ったりの催しが開かれる。

巨洞は私たちの前回調査直後に大きな火災に見舞われたようである。その後起こったことは住宅再建、鼓楼、舞台の新設、対岸との歩行橋の建設であり、寨の観光化をめざしたものであったが、それにもまして、住民の対岸への移住が進んだこと、住宅の再建にはローンを組む必要があり、その返済のため若者が出稼ぎに出たことから人口が激減している。

3、特産品に対する意識調査

2006年の調査時に行った、村の特産品調査の際は、雷山県西江は刺繍品、それ以外の村のうち侗族の村では藍染めの布、苗族の村では農産物の米、みかんの名が自慢の産物として挙げた。今回短時間ではあるが、同様の調査を行った。家族数、出稼ぎの有無、村で自慢できるものについて簡単に話を聞いた。それをまとめたのが表2である。村で自慢できるものを会話体で表記してある。多くの村民が焼き物に従事している長豊村ではそろって焼き物を挙げている。また、この村は出稼ぎ者も多いのが目立つ。高増村では以前織られた侗族の布を自慢できるものとして挙げる例が多い。2011年に撮影した侗衣（侗族衣装）をまとった人たちの写真を見せていたためもあるが、その衣装、布を誇る人たちが多かった（写真10）。他に竹籠、刺繍、餅米、醃肉・醃魚が挙げられている。芭沙村では餅米の他、醃肉・醃魚、工芸品の飯尤が挙げられている。巨洞村は以前は藍染めの布が挙がっていたが、今回は餅米が挙がるだけだった。

焼き物の村、長豊村を除いて農産品を特産品に挙げるところがほとんどであるが、高増村はかつての独特の織物で藍染めし、刺繍を施して侗衣を作ることを挙げているが現在は布は織られていない。以前は多くの村で農産品とともに藍染めの布を自慢できるものとしてあげていたが、それがなくなっていることが、全体として大きな変化といえる。かつては、日常的に布が藍染めされ、そのため藍染めの瓶が家の前に無造作に置かれ、2階から藍染めの布を干す風景は失われつつある。すでに、2006年時点で、高増村を除いて、木綿の白布は買うと聞いていたので、その生産流通の流れの中で、藍染めもされなくなったのであろう。

4、工芸品の位置づけ

2006年時点と大きく変化したことは今回は対象としなかったが雷山県西江村の観光化が大きく進んだことである。その様子は短く報告したが、周囲の経済へ大きく影響を与えているようである。特に長豊村では西江村に働きに出る若者が多いと聞いた。観光化にも関係するものとして省級非物質文化遺産の項目に選択されたところが多いことである。非物質文化遺産は中国政府が無形世界遺産の制度を元に、国内版を整備したものである。基本的には無形世界遺産を踏襲したものであるが、さらに実践に基づく具体的項目リストを設定している（注4）。「国家級非物質文化遺産の代表的項目リスト」として挙げられているのは民間文学・伝統音楽・伝統舞踏・伝統演劇・芸能・伝統体育と遊芸及び競技・伝統美術・伝統工芸技術・伝統医薬・民俗の10項目であるが、その中に工芸の対象となる伝統工芸技術・民俗が含まれている。省以下の行政組織もこれに準じた選択制度を取っており、黔东南苗族・侗族自治州では伝統工芸技術・民俗分野を初めとして多くの少数民族の具体的文化活動が選択されている。雷山県西江の刺繍は早くから選択されており、今回調査できた櫛、焼き物も省級非物質文化遺産項目に選択されている。庶民文化に光があたったことは評価できることであり、さらにその活用が合理的利用の奨励としてうたわれており、今後の展開に興味を持てる。

筆者が非物質文化遺産に注目したのは、庶民の伝統工芸技術、民俗が取り上げられていることであり、それは専門的工芸及びその技術だけでなく農家副業の工芸、技術も当然含まれることである。この視点を改めて持つと、これからも多くの農家副業の工芸が選択対象になるであろう。

そうした中で、今回調査した高増村の侗衣の為の織物、藍染めが途絶えているのは悔やまれるところである。技術保持者、生産環境（材料、社会環境）は失われていないので、早急な復活を期待したい。

5、今後の農家工芸のあり方について

今回対象とした地域は農業を基盤とした地域であり、副業の形で工芸生産が行われ、地域の人たちの為の供給をこれまで続けていたところである。地域の大きな変化は道路網の整備を取りかかりとして観光化が各所で進みつつあることだが、生活する人々の間には具体的な金銭使用の感覚が入っていたことであろう。諸般の事情があり住宅建設をする際も、これまでは木造で村人の協力で建てていたものが、鉄筋コンクリート造りで、ローンを組んで造るようになってきた。ローンを返すこと、すなわち具体的な金銭の必要に気づき、子どもが海岸部の都市へ出稼ぎに出るようになった。

そうした中ではこれまでの農家副業的な工芸の価値を高めて金銭収入を高める必要があると筆者は考える。価値を高めるためには①文化的には、小中学校の地域教材として取り上げること、②そのためのしっかりした民俗技術調査をすることと③技術伝承型博物館を設置することである。経済的には④伝承人を作家的に紹介、展示することを行い、中国全域に広く広報する必要があると考える。日本の文化財保護法も文化保存だけでなく、文化的活用をうたいはじめたが、中国の取った非物質文化遺産の姿勢からは日本の経済産業省の制度である、伝統的工芸品産業の振興法（伝産法）が大いに参考になると思われる。特に伝産法が認めた生産品にだけ貼ることのできる伝産シール制度（品質及び産地保証）や、県1カ所だけできる当該組合の施設づくり、技術保持者の登録や熟練者の顕彰が特徴的な事業内容である。

他の州は実見していないので、言及することはできないが、黔东南苗族・侗族自治州の工芸は農家副業の工芸であり、高い品質を持つものといえる。日本でこうした庶民工芸の美を訴えたのは民芸運動を推進した柳宗悦であるが、日本ではせいぜい1950年代まで日本中で繰り広げられた生活用具作り

がその対象となるものであった。現在ではほとんど見られず、わずかに柳宗悦に認められた産地や事業所あるいは作家個人だけが柳の理念を受け継いでいる。現在の黔东南苗族・侗族自治州にはその民芸の美が生きているといえる。具体的には製造品には柳の言う健康の美・単純の美・親しさの美・無事の美が備わっているということである（注5）。櫛、焼き物、機織り、藍染めは近くの自然の材料を使い、農業生活の合間に行われ（但し長豊村焼き物は専門に近い）、従って形や技術にこだわることなく、同じようなものづくりを行い、素直な形状のものが生み出され、つくるものは普段使いのもので格式張ることもなく、自由でのびのびした健康で無事のもが生まれているといえる。その美が正しく評価されるのは黔东南苗族・侗族自治州の中心地凱里、観光村西江といった近隣中心地でなく、省都貴陽でもなく、全国レベルでの展示であろう。

付 記

この報告は、山口大学基金「名誉教授による研究プロジェクトに対する助成事業」の助成を受け実施した貴州省黔东南苗族・侗族自治州工芸調査をまとめたものである。調査の準備段階では貴州大学日本語学院教員の協力を受け、実施にあたっては山口大学東アジア研究科学生、郭睿麒、曹紅宇、楊梅竹の協力を得た。記して感謝の意を表します。

注1 坪郷英彦、「苗族・侗族自治州少数民族の文化資源とその動態的保存の提案」、中国内陸部貴州省の持続的発展をめざして-環境・農村・文化と人材育成-、文一総合出版、2010年

注2 この形の椅子は杭州では竹製、湖南省鳳凰県では木製で大型のものが作られている。中国の広域で制作使用されているようである。

注3 坪郷英彦、「中国貴州省侗族の天秤棒」、山口大学人文学部異文化交流研究施設ニューズレター13号、2012年は2011年高増村調査の天秤棒を紹介したもので、その中の実測図を本報告に再掲した。また、坪郷英彦、「苗族・侗族の工芸事情」山口大学人文学部異文化交流研究施設ニューズレター12号、2011年は2011年調査した観光村化が進む西江村の刺繍と高増村の織物の共同作業について紹介している。中国少数民族の農家工芸の重要性に気づいた調査であった。

注4 中華人民共和国非物質文化遺産法が施行されたのは2011年からである。その概要をまとめたのが、周超、「中国の『無形文化遺産法』」、中国21巻39、愛知大学現代中国学会、2014年1月である。同論文は最後に、国の文化政策がかつての「文化革命」から「文化保護」へ大転換を実現させたことを意味している。同時に、一般民衆の文化創造力及び彼らの文化生活の空間に対する最低限の尊重も意味していると書いている。日本の民俗文化財の考えかた、伝産法の文化産業振興の方法が大いに役に立つと思われる。

注5 柳宗悦（1889～1961）は「民芸とは何か」、講談社学術文庫、2006年の中で、健康の美は用のため自然の素材が選ばれ、その性質に従順に無理なく作られたものが備える美。単純の美は多量で廉価であることから備わる美、親しさの美は民衆の生活に溶け込む中で備わる美、無事の美は平常の美、自由の美から生まれると4つの美を説明している。

表2 村の自慢できる産物インタビュー（2019年9月14日～16日実施）

通番	民族名	年齢	男女	集落名	家族員数	出稼ぎ者	あなたの村で自慢できる産物は何ですか
1	苗族	45	男	長豊村	4		焼き物「もちろん、焼きものです、文化遺産ですから。」
2	苗族	58	男	長豊村	7	2	土碗「こういうの作っているから、これでしょ」（今作っている土碗を見せながら）
3	苗族	45	男	長豊村	4	0	焼き物「焼きものづくりはわたしで第4代目だから、これしかないね。」
4	苗族	60	男	長豊村	5	3	焼き物「ここは『灰土』の原料が採れるところだから、みんな焼き物で生計を立てることができたから、焼きものね。」
5	苗族	65	男	長豊村	5	3	焼き物
6	苗族	52	女	長豊村	6	2	焼き物「有名物ね。若者はもう作りたくないけど、わたし達の世代はみんなこれを作っていたから、これは自慢できるよ。」（焼き物を持ちながら）
7	苗族	60	男	長豊村	5	3	土碗「これでしょう。『土碗』が一番売れやすいです。」
8	苗族	50	男	長豊村	3	1	土碗「うん、そうそう、『土碗』が一番売れやすいです。」
9	苗族	57	男	長豊村	6	2	焼き物「それを聞くなら、どうします。当然焼き物ですよ」
10	苗族	46	男	長豊村	4	0	焼き物「ははは、それを聞く必要がありますか、見え見えでしょ（焼き物）。」
11	侗族	55	男	高増村	5	3	侗衣「写真に載っている女性たちが織物をしている侗衣だよ。我々侗族しか着ない衣裳だよ。」
12	侗族	70	男	高増村	4	0	竹の編み物「この村でわし一人しか編めないこのような編み物だよ。毎日使うものだし、よくできているだろ」、「みんなよく買いますか。」「そうよ、（みんなは竹の編み物を）買わないなら、私も作らないでしょう。」
13	侗族	52	女	高増村	3	0	侗の布「それはやはり侗族しか作れない侗の布だよ。他のところは作らないし。」
14	侗族	50	女	高増村	7	2	侗の布「わたし達が着る民族衣装の侗の布よ。」「機械製もあると聞きましたが。」「機械製は美しくない。手作りが綺麗よ。」
15	侗族	48	男	高増村	5	0	もち米「もち米かなあ、いい香りしてておいしいよ。」
16	侗族	54	男	高増村	1	0	刺繍「刺繍が一番自慢できると思うよ。」「刺繍のどこがいいですか。」「侗衣に刺繍がついてると綺麗だからよ。」
17	侗族	53	男	高増村	6	1	もち米「もち米はおいしい。観光客にはお勧めできる。」
18	侗族	35	男	高増村	6	1	醃肉と醃魚「うん、醃肉と醃魚は有名ですけど、持ち帰らないですね。」
19	侗族	52	男	高増村	7	2	サツマイモ「サツマイモ、おいしいですよ」
20	侗族	60	男	高増村	5	1	侗衣「今でも聞こえるでしょ、女性が敲いてる侗の布で作った侗族の衣裳だ。」
21	苗族	85	男	○沙村	5	2	延々肉 うん、分からないですね。でも、「醃肉」がいいですよ。持ち帰りはなかなかできないけど。この下の飲食店で「醃肉」が食べられます。あれが一番いいものです。
22	苗族	35	女	○沙村	5	0	豚肉、もち米 豚肉やもち米、でもなかなか持ち帰られないです。手工芸品は代表的ですね。持ち帰りしやすいし、綺麗ですし。
23	苗族	41	男	○沙村	4	0	香豚 いま、食べているでしょう。「香豚」の肉よ、おいしいでしょう。
24	苗族	31	男	○沙村	6	0	醃肉、醃魚 いや、それらは持ち帰らないですね。「醃肉」とか「醃魚」とかが一番いいと思いますが……
25	苗族	75	男	○沙村	6	0	もち米 ははは、重たいと思わないなら、もち米買ってあげて、おいしいよ。
26	苗族	70	男	○沙村	6	1	飯朮 うん、そうだ、あれ、「飯朮」がいいです。
27	苗族	86	女	○沙村	6	2	飯朮「飯朮」はね、畑に行くとき、ご飯を入れる容器です。竹で作られたもの。そうそう、あれ「飯朮」はいいですよ。
28	侗族	72	男	巨洞村	7	3	もち米 自慢できるもの？もち米かなあ。村が焼けた後、お金を探しにみんな出稼ぎに行ったよ。こめを作る人は家に居残っている老人たちよ。
29	侗族	64	男	巨洞村	4	2	もち米 そうだね、もち米くらいです。他はないですね。

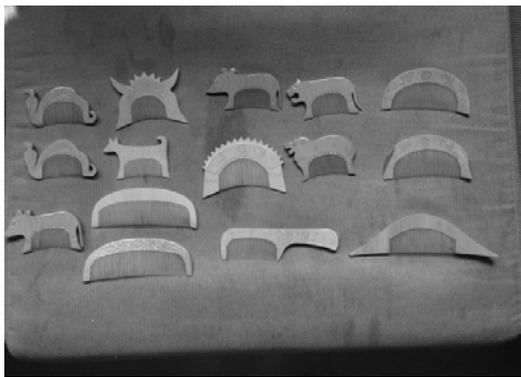


写真1 楊光学氏制作の櫛
(2019年9月撮影坪郷)



写真2 楊光学氏制作の小椅子
(2019年9月撮影坪郷)



写真3 陶器工場の連なりと新築中の家族用集合住宅
(2019年9月撮影坪郷)



写真4 酸湯仕込み用のリブのついた壺作り
(2019年9月撮影坪郷)



写真5 高増村の織物
(2017年9月採集・撮影坪郷)



写真6 高増村織物仲間による整経
(2011年3月撮影坪郷)



写真7 高増村侗衣を着た織物仲間
(2011年3月撮影坪郷)



写真8 呉氏制作・所有の天秤棒
(2019年9月撮影坪郷)



写真9 芭沙村の中心地
(2019年9月撮影坪郷)



写真10 巨洞村集落景観、対岸からの遠望
(2019年9月撮影郭)



写真11 火災を免れた巨洞村の穀倉群
(2019年9月撮影郭)

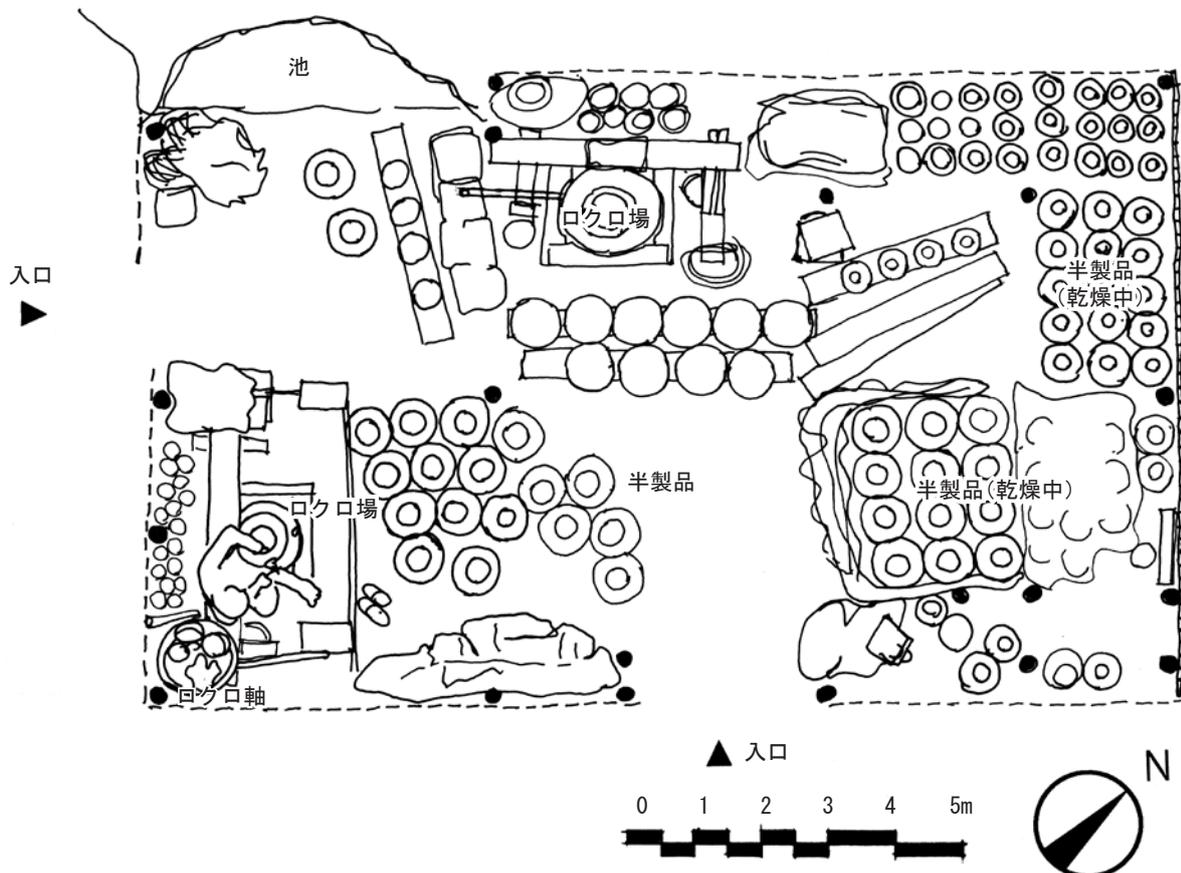


図1 羅兄弟の工房（長豊村焼き物産地）

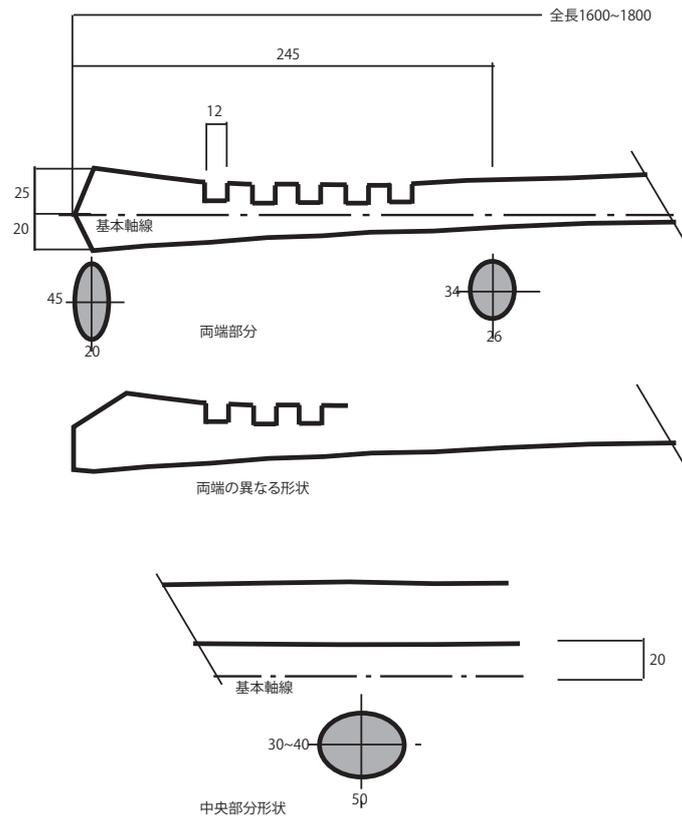


図2 天秤棒の制作寸法 (2019年9月調査)

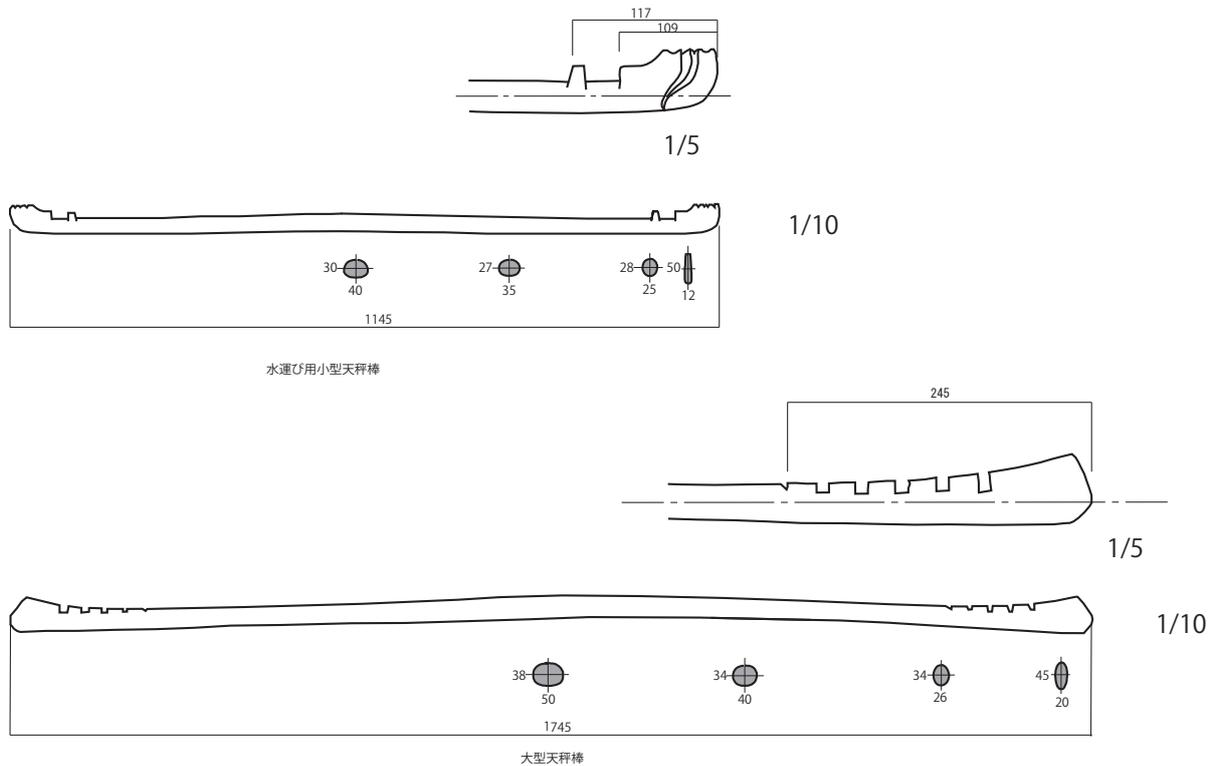


図3 高増侗族の天秤棒 (2011年3月調査)